

夏と秋の美学 鈴木其一と伊年印の優品とともに

根津美術館（南青山） 2024.09.14～10.20

『古今和歌集』においては、四季のうち「春」と「秋」の歌は、「夏」と「冬」の歌より数で大きく上回ることに示されるように、日本では、古来四季のうちで「春」と「秋」が好まれてきた。これは、気候の穏やかさばかりでなく、生命が芽吹き、あるいは逆に衰えてゆくさまをしみじみと感じさせるからであったといえる。こうした伝統を受け継ぎながら、江戸時代の美術には、春ではなく“夏と秋の組み合わせ”も目立ってきていることも事実である。



鈴木其一 《夏秋溪流図屏風》 19世紀 江戸時代 重要文化財

檜の林と岩間を流れる溪流が連続する「六曲一双屏風」に、右隻は山百合の咲く夏景、左隻は桜紅葉に染まる秋景が描かれ、樹皮や百合の花の克明な描写に対して、極端に単純化された岩笹など生々しくも非現実的な作品である。



伊年印 《夏秋草図屏風》 17世紀 江戸時代



尾形光琳 《夏草図屏風》
18世紀 江戸時代

晩春から夏にかけての草花を描き出した作品である。